

博多祇園は意地でも流
行らせろ

胡椒こしょこしょ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目つきが悪くて、それを気にしている自分に自信がない俺つ娘。
でも胸がデカくて本当は優しくて包容力があるなら、流行らないと嘘でしょ！
これは、一人の少女を流行らせるために三人の少女が力を合わせる物語。

目

次

計画の始まり

朝。

ちゅんちゅんと小鳥が鳴く中、ゆっくりと1階のリビングに降りてくる。この時間だ、両親は仕事に行ってしまっているだろう。

喉が渴いた。

お茶でも飲もう。

そう思つて冷蔵庫を開ける。

すると、中には一色の緑。

中身が全てずんだ餅へと変わつていた。

冷蔵庫の中を制圧したかのごとく、所せましと並べられるずんだ餅。

「：馬鹿だろ。これ。」

両親は出る前に朝食を作つているはずだ。

なのに、それらしきものはなく、元々ある内容物の間を縫うようにずんだが並ぶ。

その中を占領したずんだ餅を見て、目を見張る。

こんなことが出来るのは、一人しか心当たりはない。

部屋中を見回す。

すると、クローゼットが微かに空いているのが分かる。

微かにではあるが、人が居ると分かる。

「… 冷蔵庫のアレは、お前の仕業だろ？ すん子。」

そう言うと、ゆっくりとクローゼットが開く。

そして、悪戯っ子のような笑みを浮かべた緑髪の少女が立っていた。

「えへへ… 見つかっちゃた…。」

「… ところでさ、なんで居るの？」

冷蔵庫に気を取られていたが、冷静に考えるとなんで居るんだろう？
家の中にどうやつて入ったのか。

もしや不法侵入ですかね…？

そう考えると、彼女は首を傾げた。

「えつ、ここに来た時に玄関で祇園ちゃんのお母さんに会って、起こして欲しつて言わ
れたからだよ？」

「へえー。」

出る間際の母親と会つたのだろう。

彼女は幼馴染だ。

その辺、両親としては信用している……のかな?

だけど……。

「起こしてないじやん。いや、別に今日は休日だから起こさなくても良いんだけど。」

俺がそう言うと、彼女は笑う。

「あつ、ごめんね。朝ごはん作つてたら起こす機会を失つちゃつて……。起きて来たから驚かせようと思つて隠れてたんだけど……」

「……朝ごはんって……、もしかしてアレ? アレ全部つてことは……ないよな?」

隠れていた理由はそういう理由だろうと予想はついた。

でも、朝ごはんつてもしかして……あの大量のずんだ餅とか言わないよな?

嫌な予感を感じながらも確認する。

すると、彼女は首を傾げる。

「えつ? 全部だけど……何かおかしい?」

「いやおかしいでしょ。あんな量朝から食えるわけないよ。しかも全部ずんだ餅だぞ!?

すると、彼女は更に不思議そうな表情をする。

「えつ? あの量を朝に食べるのつて普通じゃないですか? ずんだ餅ですよ?」

「ちゃんととつてずんだ餅が一体何なのかな? 小一時間くらい聞きたいくらいだよ。」

どうやら目の前の少女にとつてはあの量のずんだ餅を朝から吃るのは普通らしい。

東北家の食生活が心配になる瞬間だった。

彼女の妹は大丈夫なのだろうか……いや、姉の好みであるならあの少女は文句言わずに食べるだろうが。

すると、彼女が不安そうな表情になる。

「えっと……迷惑、だつたかな？」

「……いや、食べます。ずんだ美味しいもんな。朝はずんだじやないと力入んないっていうかさ。」

誤魔化すように二の句を継ぐ。

まあまずいわけじやない。

ずんだは上手い。

ただ朝にはあの量は辛いだけで。

でも、彼のことだし言えば全部吃るのは勘弁してくれるだろう。

あの量だから……昼に分けて吃べるか？

「ですよね！祇園くん！」

眩しい笑顔を浮かべる彼女を見て、心中呆れながらもテーブルへと向かう。すると冷蔵庫から沢山ずんだをテーブルに並べ始める彼女。

なんだろう、ずんだの品評会かな。

業者を家に呼んでるみたいだあ……。

……この量、全部はやつぱり無理だなあ。

「えーと、その。ずん子さん? この量全部は流石に無理なんで……食べられなかつた分は昼とか夜に食べるつてことで良いですかねえ……?」

俺がそう聞くと彼女は笑顔でサムズアップする。

「いいよ!……それにしても、祇園くん案外少食なんだね……そんなんじや大きくなれないよ?」

「これ以上デカくなつたら天井に頭付くでしうが。」

それにこんなの全部朝食で食べられる方がおかしいでしょ。

そう思うも、そこは言葉に出さない。

目の前に並べられるずんだ餅を前に手を合わせる。

「頂きます。」

そう言うと、ずんだを一つ手に取つて口に運んだ。

……うん、旨いね。

豆の香りと上品な甘さ、そしてもつちりとした餅。

多分これほどうまいずんだ餅は他にないのではないかと思う程のうまさだ。

だがそれとこれとは別。

いくらうまくても量と頻度が多ければ食傷気味になるというもの。
俺は笑顔で彼女に感想を告げる。

「うん、おいしいよ。」

「私のずんだですもの！当然！」

彼女はその感想に胸を張つて自慢げに返す。
確か夢は東京にずんだカフェやすんだシヨツプを作つてずんだを広めていく事だつ
たか。

どんだけずんだが好きなのか。

彼女のずんだ好き具合には驚嘆させられる。

更に2～3個口に運ぶ。

： 餅つて結構腹に溜まるなあ。

とにかく後に残せば残す程苦しくなるのは必然。

昼ご飯はさておき、一日ずんだは流石に食べたくない！

もつと別の物が食べたい！

そう思い、餅を口に運んでいく。

もはや味を楽しむと言うよりは腹に流し込むと言つた要素が大部分を占めており、無

心でただひたすら機械のように口に運び続けた。

そして10皿目。

もうね、腹はパンパンで苦しいんですわ。

身動き取りたくない。

「ご、ご馳走様でした……。」

「お粗末様でした！じや、後は冷蔵庫で保存しどくね」

「あ、ああ……。」

自分が食べられたのは全体の3分の1。

まだ3分の2が……残つていて。

少し、気持ちが暗くなつた。

そうして、ふと思いつ。

そう言えば彼女はここに来た時に母に言われてこの家に入った。
ならば、元々何しにここに来たんだろう？

「そう言えばさ、本当はお前何しに来たの？」

俺が問うと、ずん子は答える。

「いや、せつかくの休日だし、遊びに来たというか……」
遊びに来たか……。

なら、正直俺の家に来たつてどうしようもない気がする。

あんまり最近のゲームがあるわけじゃないしな。

それなら……。

「なら、逆にそつち行こうよ。きりたんだつて居るんだろう?」

思い浮かべるのは小生意気なすん子の妹。

先日、FPSでボロクソにやられて煽られたのでリベンジしたかつたのだ。
大人を煽るとどうなるか…… 思い知らせてやる…… 秋田のガキイ!!

「祇園ちゃんが言うなら良いよ。」

「決まりだな。じゃあ着替えるから先に玄関で待つててくれ。」

そう言うと、俺は食器を全て洗い終えて2階の自分の部屋へと向かう。

そして出来るだけ急いで着替えたのだった。



「そうして態々私に負けに来たつてわけですか?」

東北家の玄関で、彼女は勝気な笑みを浮かべる小さな少女。
すん子の妹である東北きりたん。

背中にはきりたん砲なる大きなきりたんぽを背負つてゐる。

狭い路地だと歩きにくそうなことこの上ない。

「この博多祇園を舐めるなよ……俺は昨日までの俺じやない。常に進化し続けてゐるんだ。お邪魔します。」

「へえ、大口叩いても知りませんよ……また私がずん姉さまの目の前でボコボコにしてあげます！」

そう言うと、靴を脱いで家に上がる。

そして、きりたんに目を向けると彼女はある部屋へと歩き出す。

それはきりたんの部屋。

最早言葉は不要。

ゲームで決着をつけるつてことか。

さすがは俺の好敵手。

すると、奥の方から戸を開けて白い髪の女性が歩いてくる。

「あら、誰かと思つたらおんちやんでしたのね。」

東北三姉妹の長女、ずん子の姉である東北イタコさんだ。

なんでも、イタコ専門学校を主席で卒業するような凄いイタコで狐耳生えてたりするよく分からぬ人だ。

そもそもイタコ専門学校つてなんだ？

「どうも、イタコさん。ちょっとあなたの妹貸してもらいますよ。ケジメつけますから。」

「駄目ですわ！妹の指がなくなる瞬間を姉である私に黙つてみていろつて言うんですの！」

「……人の事、なんだと思つてるんですか？」

イタコさんをジト目で見ると、イタコさんは冗談と小さく笑う。

少し、イタコさんは苦手だ。

というより、年上の女の人が苦手なのだ。

そういうのは母親のせいでもあると思う。

反面、お父さんはまあ……嫌いじやないよ。

うん。

「うーん、おんさんは目つきが悪いですからね……」

「そ、そんなことないと思うけどなあ……」

「そんなことないですよ！祇園ちゃんはずんだを吃べるときはそれはもういい笑顔で……」

多分それは嘘だと思う。

だが、目つきが悪いことは良く言われる。

なので慣れている。

慣れてはいるのだが少し傷つく。

「どうか、せっかくおんちゃんも来たのなら外に行きますわよ！ ちょうど運動してい
るずんちゃんの写真集を作る為にも外に行く必要がありましたの！ それにセパタク
ローなるスポーツにも興味がありますもの！」

イタコさんが高らかにそう言うと、きりたんはどことなく顔を顰める。

「ええ… 外出たくないです…。」

「もうっ！ 偶には外に出なくてはなりませんよ？」

イタコさんはきりたんを説得している。

⋮
写真集か。

イタコさんの夢はずん子を全国区のアイドルにすることだつたか。

たしかずん子のずんだよりも彼女の写真集が売れるくらいだし、そのくらい注目され
ているのだろうか？

ずん子はスタイルも良いし、可愛いし明るくて親しみやすいから確かに人気が出そ
うだ。

それに髪飾りやなんか前に出してた枝豆みたいな弓とか弓道やつてるとか個性豊か

な少女だ。

それに比べて俺には何もない。

俺とは大違ひだなとなんとはなしに思つた。。

目つきが悪いって言われるし……俺には何もない。

写真集とか……そういうのに、憧れるとかそういうことではないけど、でもそう考えるとなんというか……。

「……祇園ちゃん？」

「……あっ、いや……何でもない何でもない。」

ずん子が心配した表情を浮かべて俺を覗き込む。

ちょっと表情が険しくなつていただろうか？

私は目つきが悪いって言われるしな……。

「そうだぞきりたん。やっぱ今日は復讐はなしだ。イタコさんが言つてゐる通り、外でセパタクローでもやるか！」

「貴方までそういうこと言うんですか……。」

裏切られたような表情を浮かべるきりたん。

そんな彼女に耳打ちする。

「お前の面倒臭いという気持ちはわかる……でもよく考えてみろ、写真集も撮る気なん

だ。ずん子のあんな姿やこんな姿が見られるんだぞ？…それを、面倒だと言う気持ちで逃して良いのか？それは本当に東北ずん子の妹、東北きりたんだと言えるのか？」
「…確かに、ずん姉さまのあんな姿やこんな姿…」
「…」

分かりやすく生睡を飲むきりたん。

まあイタコさんの事だからそんないかがわしい服着せたりはしないだろう…しないよね？

すると、彼女はさつきまでとは違つてハキハキとした口調で続ける。

「イタコ姉さま！私、やつぱり行きます！」

「そう。よかつた。ずんちゃんも行きますわね？」

「う、うん…。」

ずん子が返事する。

すると、善は急げとばかりにイタコさんは外に出る用意をする。

他の二人も同じだった。

昔から来ていた東北家の家の匂い。

俺は、この匂いが好きだ。



夜。

とあるチャットルームにて。

『… という事があつたんですよ！ 多分、言い出せないだけで、祇園ちゃん気にしてます！』

一人の少女がはつきりとそう断言すると、その声に答える声。

『それは聞き捨てなりませんね。目つきが悪いってことは悪い事だけではないと私はつねづね…』

くどくどと言葉を続ける少女。

そんな少女にお氣楽な声が同調する。

『祇園ちゃん優しいし、話しよく聞いてくれるしね。まあギャップ萌えって奴？ ゆかりんが言いたいのつてそういうことでしょ？』

三人の少女は博多祇園という少女について話をしている。

『それに目つきが悪いだけで可愛いですし、なにより胸が大きいですし！ 胸がつ！！ 大きいですしつ！！』

『ゆかりん、そこめっちゃ言うじやん。』

声を荒げる少女とそんな少女の声を聞いて呟く少女。

すると不意に二人の会話を切り裂くようにもう一人の少女が口を開く。

『これはもう、例の計画をするしかないです！』

すると、二人の少女もその言葉に反応する。

『それってもしかしてあの……？』

『本気ですか……？』

一人の少女が確認する。

すると、提案した少女は断言する。

『はい……今こそ、祇園ちゃんアイドル化計画を始める時です！合言葉は覚えていてね？』

そう言うと、息を吸う。

『当たり前です。』

『へえ……いよいよ始まるんだ。』

そして二人も息を揃えて声を出した。

『『博多祇園は意地でも流行らせろ』』

かくして三人の少女による一人の少女の為の計画が始まつたのだ。